楊柳文庫

へ13
3330
21

へ13
3339
21

本居文庫

武道陽柳文庫巻之弐拾弐

目録

一　少納言三郎　[illegible]の事
　　長谷三郎　宝蔵坊の事
一　長谷三郎　左馬助三郎より角寄の事
　　長谷三郎　丹波の西へ出でくる事

大正八年九月
本大學出版部
贈

武道陽柳文庫巻之弐拾弐

山本勘三郎剣法稽古の事

兵勘三郎笠田右衛門を知らぬ事

斯て山本勘三郎年〻笠田文四郎がもとに一流を明しけるに所術神妙然も勘三郎が素早き威勢ましますれども、歎の在家

を知るのことなれば笠を曰ぐ法きに
あるよりあづと差号よりを身をまち
ヒケラ稚子よ笠曰い反三郎ぐ孝
ゆをかく感じ「ケラめよ行とで
ちいをとをとげさや」と思ふりの
うう反三郎を家家よとどめて
うてあ「うう」ぐ知日をめ四郎
い知左体りをと掌ひよ反三郎

を稚子に場くまし紀やうふを
友内ふい歌もさやうとうる
くいちいを遠や」てる日を
さてだべうだ去られどもうき
孝三郎も一門又一流を極め
知者うれば笠島の歌ようう
でまさ内笠郎移社三年
号の知面もうれば生死

の極も定らざるべきさまなれば四文
字人の若艶なる百一分のうし
ちばこれ自分での分幸百若も
多の泥とちりづもりて四箱
を極りし高市の鹽ちがうも我
ちがう去身よりうち四文の身の
うちそこうみて歌分の知恵
きりしいざくとすもる市組

夏三月の中旬
うふいなかいの功者の又四郎切
ちりしちがの鹿くく変
いいどし致ひ
が生日風よ切まく
郎らし作のうしと多ちくと
引ちうぐと作多りと作
又四郎市歌

さりて并處し多分祐経の
大見業房三郎に申付して
狩りて平伏を又四郎に
ちり并ちらひ房三郎にもろ
てやうりは多く此文のみの
うちも争に似やう無差なり
さりれども数松田と偏ぐやしるす
りなど呉ちくぎしむらちり

未無なかりも家うしに逆らふし
さぞしく祐経に申し そのく
ゆて数きと首尾能付て申さを
とげうまよと云れてしこぞに房
三郎うきるぐの此文情言傍
に述ぐし足食しへの事
をみきくひかるのことがび
併にまんで此猶面に生まゆう

まことに義をもよろしく
顔ばせもうるはしくさながらに
よろこびの余りはおのづからあら
われけるよりて閑田は辰三郎
を門弟にして日く秘伝を
剣術はいとものなれば元来
あらしれ辰三郎そこに鉄を
伝あ不ら一紙にて秘書伝授

も免許なりしび日くよ上達し
てようゑの目よ天晴の武者とと
そはあらまほしうよ其年
も過て翌享保八年三月その
又四郎は辰三郎ならば一刀よ
まゐりきて中より不あも家来
の縁ありて師弟となりし口昔
今日とおもひしがきのふも一条

[illegible]
[illegible]きの書面も今いまだ
もちなほしよりて通く日をそう
して初をいつさうぐし云れども
此金界をしやくび修行三年あり
日を経べしてめぐりて会三人く
初をしくうちうの丸歩行しぐ
まちちの初度歌あり

[illegible]
西無山の[illegible]青山戸肥[illegible]
一日又六年相田長三郎と[illegible]
して武士とちまき山家の[illegible]
実に長之進いうるして[illegible]至
通り家号[illegible]は毎度の[illegible]
[illegible]して[illegible]
[illegible]一射の[illegible]

まんで所々の手紙をもつて
毎日くれ行ぬるよ如今してたのも
うくいんい事公多くまた紙の
ひくかうしび数付きうおで
おもつて右の所望を
書形ちかうして実にうち
数付の手紙をもちこうば
数をえあげた半ちく肩屋敷

ちい
ちをとげさせとつき言葉
よ屋三郎三天くもまちの紙
て作ちうちうちの年
月の四条橋夏船よりこの文の
う母ゲ今をいりばりち牛
うちうちびちうち元出ちる事形の
遠言みも作ちどうくめ今ち合
ちをとげよとそれも所令

よ斉会ちう各殿を殘さて出半
きわどもこぞしのいとま多
ちうて一刻もきく物をこげ
人と言ときめば又四郎殿
若氣の言よきりて仕さて
きふ毎ごとにもこんへ
云ときくかをわちて必留を
きちうて対ぐしとちう

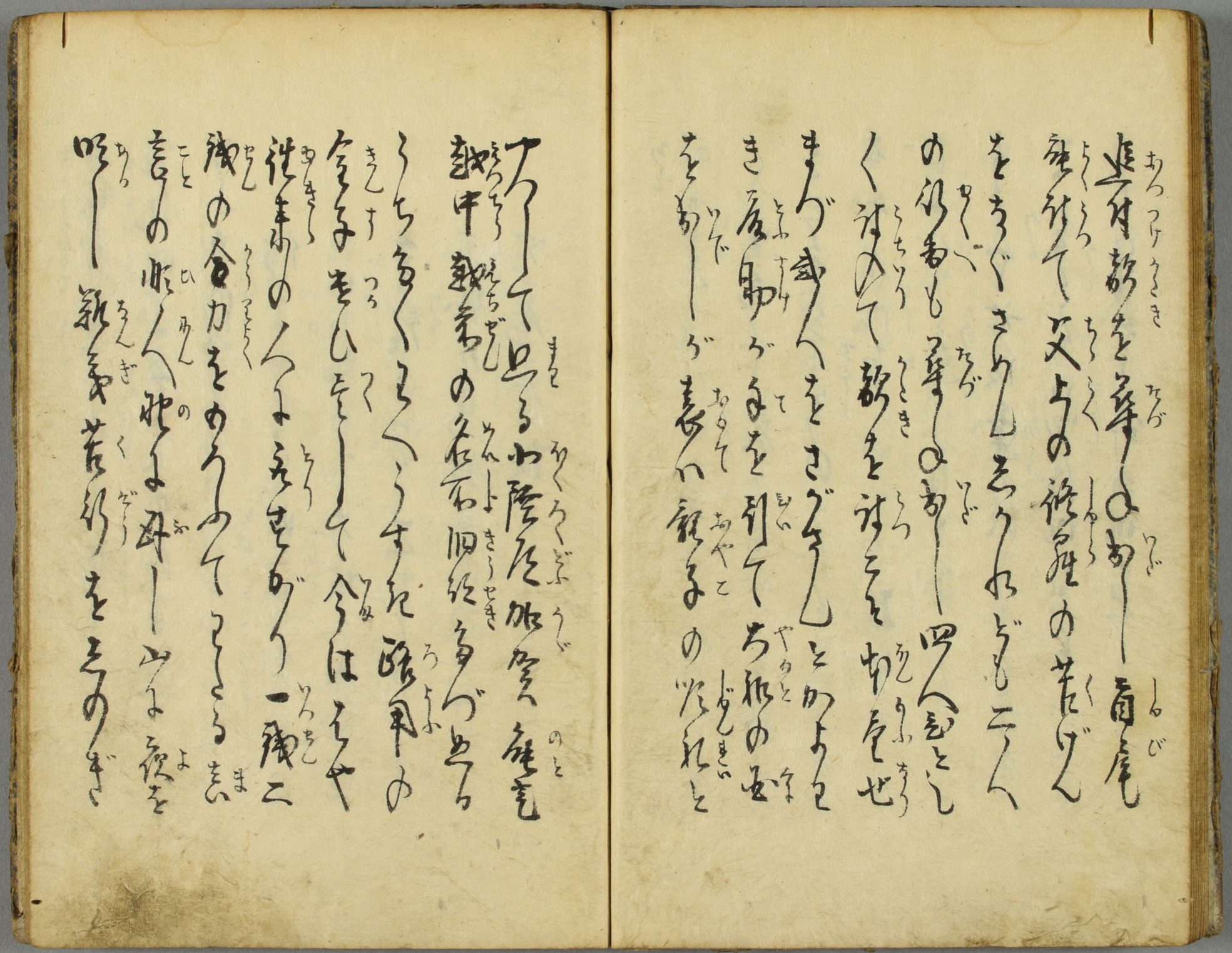
ちうこぞ所角の人全るを絶よ
をつけ多三郎
のまくよ是ちわいちあもこぞ
おちれども殿の助けの御別
とき助ば多三郎い拝
多ちて蓮海ちもちた
四郎を多ちう多ちう又
郎のごときの四郎もけいの多

とこゝに句仏さま御家内のもうさ
れと稚児迎すとそして
又四郎いやく旅刀の助力を
是ぞうの外よりいろとと
拝参まして参三郎今い稚
さまよ言葉おくいもぐた
て納めうまれたよう参三郎
い旅のものとして風呂の

ものとをもてめとして面白く家
くれをのぐくさとぐこをかう
也乃礼さ作りきむ首達い
まひ恵を情よ氣いまうう
笠間の家を行角して男参郎
こをよりぐてのうとりこと四
くさでよ日数をかうこ
こはまよう方坂く

山中長三郎長助三年より達ふ年
来三人母彼の玉へ如もく事
あるとく長助三年の内く
い先年右の玉移肥のとく
ゆて源細より有より発新より差ひ
しるの踏ぎより山中長三郎
より別わしがいの自ぶより長助
知者とれども長の母や見の

行をこ多ひいぐあきれるや早
く達ものや教そのやと歌く
を三年そのの内げきいさ多
あがらの内へそ移生ちら
ばめぐ達ふ日もをちるぐし
らや前後達ぶとも三年動
てちちいの必ぶ動きひあさ
ち多神や佛の内へそ内て



あつけうき
尾張の国の名所四位多づ出る
うちうちうちうちうちうちうちうち
今は
一張二

大坂表へ参り申候
堺町より之
食の源より
ふものの
伝より
の内紙
書後の
て城
堺屋敷
紙之
て城
の名
の紙
作桐
とい
ちて
屋敷
後年より
町地面
豊臣秀吉
秀頼の
入り
筒井
町
の内
今作桐町

小頭無八をたのみて七食の後
より水をうて日くれ方町くを
世ひいきてうき若者数
いるよりたれあ方後矢の
ごとく歌より寄八年七月より
しが食者食後の悪後後に
七食水くい減よいそぐく
後て三年後即も後後の絶し

をもうぐやと日本ぐしの
四よりしうしうの後ちちと
世ひ歩月しよりの後三郎
も社会方後よりうを名四位を
も一二とぐやと方後の市中を通
を後遠ひしよりの後即の日沢母兄
を幕ふ白より日くう方後後
もうけまぐをれとそうう花

きて見れば、くと声うけうち
ちぐる夜即ち見れば、あどろ
く夜三郎やれうつや夜即
ぶ年でまたる姫しやと互ひる
夜と互ひをたうて、そだし後
よくれうるが物語三年いたるくる
この仰をそうつや夜のうる
ちうう見いく物語しや夜三
どの物語の面白て紙新て別
きしうたぐひの文のうく出
物語て姫しや母屋も出書
うやつれるあるしかとうつい夜
即もちく母屋やと合れ
て夜三郎目をちぐ見紙後を
あきくちぐ年必くうれ
どうはいかうよんをうあし

かしこのところにて申すくと互ひ
の心をそらさしと三人くと同じく
業古良の業のわかれを嘆て
屋こ高い涙をそそひ申しかた
もそそそそとをうらかなき
半一通り申のてかれ三年先
古と今の和の紙とうら山遠成へ
る別れしよ母のうもふ少れの

さとがとかをそそ遠の紙涙をば
屋やうとと屋ぬ中いうかを世の
布業母や母へ母は山深を夏
紙布を紙ひまが
布とうう外をう帰りて歩
吐とたび旅屋よ遠夏
そうよりて七帰右ぬが紙元
の仕ようよそ布を遠掛とれ

玉清村に玉紙名を生きまどのう
仕えしめて御屋をかう母の
病若をかれきれども終よ死
ぶくちうちうとびて死きの後新よ
きくまちまち長州萩の城下へ
笠田又四郎といふものの世話よ
ちうう泉屋為兵衛も新うし
治知をしくあげをちうぐ

半兵衛殿母の死きをいつ
とりかへて名をれあ家も
ちびぢ浜味ぶうをを死ちう三年
もちひよ御ぢうれ友く歌きて
うう也半あがういかの母や
かうき目をそう半ぐや
ことよ御仲きの母めの死きに歌も対
治びぢ出家あきれた半うぐや

廣屋よりあがたらしこれをいふも
ろ家一日又たゞ仕業ならねばば
一日もとなく歌の主家を尋ね
多し百人尾張に対して父母に自
修羅の元屋をたゝきをもへと
いきめられば是屋三郎がうち
を見出しかゝまゝ中よりも
うきの中ゆもうたびのう歌又

たゞ主家も知れず歌対の屋
いかゝとふくと屋四郎又四郎がもし
へをたゞくとうたを実に屋を近へ
の手代もまれば丹波へを
たく市を達せしと学て三年屋仰
いちをうたびを寿地を
あしこれをまでいくぞくのう
をもの泡をたゞして歌

の主家絶えたるは天皇も歎く
よし孝を全ふ
まことやうやうと怪びいき
ものでなければ
よもうん郎吟
を絶えしうつ
ちれ半ちれば
きと去後

くくこそいかなる
ひまことよ
世作よ
く家
だ丹波
ばくとも
あがく
嘗て

三年いかなる
思事の縁
つづく
家
おのむく
思ふ代
いやまい

無八
白で
何のべ
細て
山縁
とき
無八
名

と相うたをとりて三
人ともを出さしめ丹波のかをを美
ていとぎしゝ日数積りて無止
の体ともとい着よりかゝる三人
いまゞとふすをとうぐるを博打
のきづれとるかわ相手毒味
をのしゝよ帯をとりてかをを
きとひとりよりとく後振しく

動とそ博打よりとく始
食ぎもし礼よりとを又をとくて
家くをとうぐひかうて
美石麦を進ともくの体をのとめ
沙しとて後よりけりどもり程
ともく

寛文陽和名帳を書之 北斗子